

大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題 (2)

— 対面授業とオンデマンド授業の比較 —

大 杉 成 喜

要旨：令和2年4月、新型コロナウイルス（COVID-19）流行防止の観点から多くの大学で対面授業が制限を受けた。本学では6月1日より対面授業を再開したが、受講者の多い講義はオンデマンド型講義を実施することとなった。著者が担当する教育学部「特別支援教育の基礎（第3 Semester）」も昨年度までの講義をオンデマンド授業として再構成し、期末試験のみ前年度同様に実教室で実施することとなった。令和元年度（対面講義）の成績は平均86.69点 SD10.14, 令和2年度（オンデマンド講義）は平均85.33, SD10.80で、対応のないt検定で有意差は認められなかった。オンデマンド講義でも対面講義と同様の学習効果があげられることが確認できた。一方、受講者は対面講義を希望しており、また、学習意欲の継続に課題がある学生は継続して励ます必要があるなど、オンデマンド講義の問題も見られた。

キーワード：特別支援教育 知識・理解 オンデマンド講義 COVID-19

I. 問題と目的

「教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令（平成29年文部科学省令第41号）」（以下、改正省令と記述）に従い、全国の大学では教員養成カリキュラムの再課程認定が行われた。

本学教育学部教育学科では、平成26年度入学生より基礎・必修科目として「特別支援教育の基礎（第3 Semester）」を設定し、教育学部教育学科学生の卒業要件としてきた。これは、幼稚園・小学校・中学校・高等学校等の通常の学級の教員となる学生に対して、「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」に関する内容をもって講義を設定したもので、改正省令が要求する内容と一致したものである（大杉,2020）。

令和2年、新型コロナウイルス（COVID-19）の世界的な流行により社会全体が活動制限を受けることとなった。本学では4月8日（水）より授業のための登学を停止し、オンライン化に対応可能な授業の提供を開始した。また、当面オンライン化に対応できない科目は休講とし、配信準備を

すすめることとなった。

オンライン授業（遠隔授業）は授業科目の到達目標・授業形態等にあわせて以下の方法で実施することとなった。

- 1) 双方向型授業…決められた時間に情報通信機器を通じて対面で受講
- 2) オンデマンド型授業…任意の時間に LMS (manabacourse または MediaDEPO) にアップされた教材をダウンロードして受講
いずれの授業も、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を行い、学生の意見の交換の機会を設けるものとされた。

著者は担当する春学期の5つの授業を速やかにこれに対応した。学生の受信環境に合わせて双方向型授業を録画し、講義後も manabacourse で閲覧できるようにしたハイブリッド授業として進めた。

一方、「特別支援教育の基礎」は受講者が274名（教育学部247名、文学部の小学校教諭免許状取得希望者27名）と多く、すぐにはオンライン授業を実施せず一旦休講し状況を見ることとした。

その後、三重県の新型コロナウイルス流行の沈静化に合わせ、大学機能の段階的緩和スケジュールが講じられることとなった。5月25日(月)よりゼミ科目(初年次ゼミ, 3・4年ゼミ)と大学院科目の対面授業を先行実施し、6月1日(月)からは受講者100名までの科目で対面授業を開始した。しかし、受講者247名「特別支援教育の基礎」はオンライン授業を実施することとなった。また、大人数の講義については双方向型授業ではなくオンデマンド型授業を講じることとなった。

ここで課題となったのは「対面授業の品質と学力保障をオンデマンド型授業で実現できるか」ということであった。本稿では新型コロナウイルス(COVID-19)流行防止体制の中、著者が担当した教育学部「特別支援教育の基礎(第3セメスター)」オンデマンド授業の試行を報告するとともに、受講学生の知識・理解をこれまでの対面授業と比較検討する。

II. オンデマンド授業の作成と実施

教育学部2年生の必修科目「特別支援教育の基礎(受講者が274名)」をLMS(manabacourse)を用いてオンデマンド型授業を行う。講義16回日

の期末試験を実教室で実施し、その成績を前年度と比較することとした。

1. LMS (manabacourse) による講義

LMSとはeラーニングの実施に必要な学習管理システム(Learning Management System)のことで、自校サーバを設置し開発・運用するオンプレミス型とクラウド上の仮想環境で運用するクラウド型がある。本学が利用するmanabacourseは株式会社朝日ネットが運用するクラウド型LMSで、全国109大学(2020年9月)で利用されている。COVID-19流行以前からも授業資料配布や課題提出に活用されてきたため、学生は基本的



図1：授業コンテンツトップページ

表1 「特別支援教育の基礎」のカリキュラム(令和2年度オンデマンド版)

第1回：オリエンテーション
第2回：国際障害観の変遷と障害者の権利条約，インクルーシブ教育
第3回：障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律と学校教育，基礎的環境整備と合理的配慮
第4回：特別支援教育の歴史，自立活動とは，矯正教育等広義の特別支援教育
第5回：幼・小・中・高等学校における特別支援教育，個別的教育支援計画と個別の指導計画，校内体制と特別支援教育コーディネーター
第6回：特別支援学校における教育（視覚・聴覚・知的障害，肢体不自由，病弱等の障害の重い子供）
第7回：特別支援学級における教育
第8回：通常の学級に在籍する特別な教育ニーズのある子供
第9回：自閉スペクトラム障害のある子供の理解と基本的対応
第10回：ADHDのある子供の理解と基本的対応
第11回：LDのある子供の理解と基本的対応
第12回：発達障害児への基本的対応，通級指導教室の指導と在籍学級の連携
第13回：授業のユニバーサルデザイン化
第14回：就学相談・進路指導～教育支援委員会
第15回：まとめ そのほかの様々な特別な教育ニーズのある子供の支援
第16回：期末試験

(皇學館大学シラバス, 2020)

な使用方法を理解していた。

これを用いて前年度までの講義をオンデマンド型授業に再構成した。カリキュラムの概要を表1に記す。これは改正省令に従い再課程認定を受けたものであり、基本的な内容は昨年度と同様である。以下、作成したオンデマンド講義について述べる。

(1) トップページ

毎回のオンデマンド講義は manabacourse の「コンテンツ」に作成した。図1に最初に示されるトップページを示す。毎回の授業コンテンツのアイコンを数字に何回目の講義であるかを示している。トップページには授業コンテンツの他、コースニュースとスレッドがある。コースニュースは受講者へのお知らせを、スレッドは学生からの質問等に使用した。

(2) 毎回の授業コンテンツの説明

授業は manabacourse のマニュアルに従い標準的なコースコンテンツとして作成したが、学生たちは当初全員がオンデマンド授業に慣れているわけではなかった。第1回オリエンテーションの閲覧記録を確認すると、最初のページを閲覧しただけで他のページを閲覧しないまま学習を終えている学生が散見された。そこで毎回の授業コンテンツの最初のページは「①オンデマンド授業閲覧方法の確認」を表示させ、次ページから講義コンテンツを開始するようにした。manabacourse のコンテンツ画面では右の「ページタイトル」にはその回の講義のページ一覧が示されるが、これに加えて第3回から各ページの最後に次のページへのリンクを置いた(図2)。

また、「講義はその回の全ページを閲覧してはじめて出席とカウントされます。manaba は詳細な個別の閲覧記録を残します。個別の閲覧記録から、ページの閲覧を飛ばしている、閲覧時間が極端に短いことがわかります。その場合は出席とカウントしません。通常の講義と同様、5回「講義を受講していない」と判断された時点で履修放棄の扱いとなります。」との説明を加えた。



図2：①オンデマンド授業閲覧方法の確認

表2：「第4回特別支援教育史」の授業構成

- ①オンデマンド授業の閲覧方法の確認
- ②本日の授業の内容
- ③前回のレポートの振り返り
- ④ロジータとグローバーの配慮ってなあに？
- ⑤特別支援教育の歴史 (1) 障害のある人の処遇の歴史
- ⑥特別支援教育の歴史 (2) 近代障害児教育のはじまり
- ⑦特別支援教育の歴史 (3) 近代日本の障害児教育(1) 盲・聾教育
- ⑧小テスト
- ⑨小テストの解説
- ⑩特別支援教育の歴史 (3) 近代日本の障害児教育(2) 知的障害・肢体不自由・病弱教育
- ⑪今週の三保先生
- ⑫本日のまとめ

(3) 授業コンテンツの構成

オンデマンド講義の内容は昨年度の対面講義にできるだけ準じる形で構成するようこころがけた。「第4回特別支援教育史」の構成を表2に示す。

講義は5～10分程度のモジュールによって構成した。解説動画は manabacourse の制限から

30MB以下（6月22日から50MB以下）に押さえる必要があったため、TmPGEnc（ペガシス社）により640×360ピクセルサイズに縮小して再エンコードした。これをmanabacourseのコンテンツ画面に添付し、PCにより動画再生と資料閲覧が同時にできるようにした。

昨年度までの対面授業では隣席と話し合う、ロールプレイをするなどアクティブ・ラーニングの内容を取り入れていたが、オンデマンド講義では視聴が中心となる。そこでこれまでの対面授業での課題も紹介し、「紐結び課題」等は一人でも試行できるようにした。また、前回の授業後レポートから数名を紹介することで、レポートの書き方についても学習できるようにした。

小テストは、毎回の講義の内容に関わる教員採用考査の過去問題から出題してきた。対面授業では一斉に解答し授業の中で解説していたが、オンデマンド授業ではmanabacourseの小テストの自動採点機能を利用し、解答後に解説動画を閲覧できるようにした（図3）。期末テストにはこの小テストからも出題し、受講者の学力の定着を確認する手立てとした。

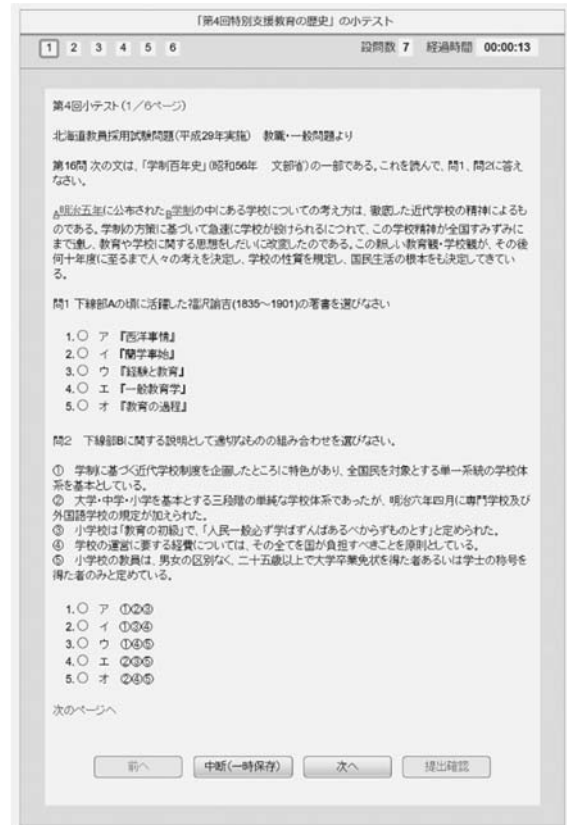


図3：小テストの例

(4) 関連する外部動画

一昨年度の対面授業から、YouTubeのセサミストリート日本公式チャンネルの「多様性とインクルージョン」より、自閉症スペクトラム障害のあるキャラクターであるジュリアの動画を紹介してきた。これは世界自閉症啓発デー・日本実行委員会のキャンペーンにも用いられているキャラクターで自閉症理解推進のシンボルとして知られている。第1回オリエンテーションで学内に掲示されたジュリアのポスターを紹介し、自閉症スペクトラム障害の特徴と基本的な対応について講義を進めた。オンデマンド講義ではリンクを示し、YouTubeの公式動画を閲覧できるようにした。図3は「フリーズダンス」の動画を視聴し、ジュリアの音に対する過敏性に気づき、友人であるロジータとグローバーが行った配慮について考察する演習課題の例である。

図4：外部動画の参照の例

(5) 障害のある当事者のエピソードと遠隔講義

昨年度までの対面授業では毎回ALS（筋萎縮性側索硬化症 amyotrophic lateral sclerosis）のある歯科医である三保浩一郎氏のエッセーやFacebookによる活動報告を紹介してきた。常時人工呼吸器

を装着し、視線入力と人工音声によりコミュニケーションを行う三保浩一郎氏が語る、旅行や当事者支援、専門の歯科・口腔衛生等の考察は学生にとっても新鮮で好評であった。オンデマンド講義でも「今週の三保先生のコーナー」として紹介するとともに、第8回ではゲストスピーカーとして講義をしていただき、また第10回では学生の質問に答えていただいた。

第8回ショートレポート「三保先生の講義の感想・質問」を送付した後の7月23日、「京都 ALS 患者囑託殺人事件」が報じられ、第10回では ALS 当事者であり歯科医師でもある三保氏の考えも聞くことができた。学生たちにとって貴重な学びとなった。

Ⅲ. 対面授業とオンデマンド授業の比較

1. 調査対象者

教育学部春学期（前期）開設の「特別支援教育の基礎」の履修登録者は令和元年度（2019）が259名、令和2年度（2020）が276名であった。

このうち小学校教諭免許状取得を希望する他学部の学生と再履修者は比較対象から外した。また、「②授業後の知識定着の調査」は期末追試験の受験者を除外した。

2. 方法

(1) 授業開始前の発達障害に関する知識の調査

授業開始前に受講者の発達障害に関する知識の調査を行った。前稿「大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1)－教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して－大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1)－教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して－」（大杉, 2020）同様、菊池（2011）をもとに調査項目を構成した。

令和2年度は、オンデマンド講義配信前にmanabacourseのアンケート機能を利用して実施した。前年度までの授業開始時の質問紙による一斉実施方式とは異なり、解答時間や場所にはばらつきがある。

図5：ゲストスピーカー遠隔講義

(2) 授業後の知識定着の調査

前年度の問題をもとに作成し、実教室で期末試験を実施した。前年度までは隣が詰まった席で実施するため不正防止の観点から2種類の問題を実施してきた。今年度は密にならない席での実施となったが、前年度を踏襲して2種類の問題を作成し、その成績を比較することとした。

3. 結果

(1) 授業開始前の発達障害に関する知識の比較

平成29年度、平成30年度、令和元年度、令和2年度の授業開始前の発達障害に関する知識に関する調査得点について1要因の分散分析を行った結果、各年度の正答総数（20問中）について有意差は見られなかった（ $F(3,990) = 2.041, p = .107$ ）。

また、それぞれの年度の各項目の正答数・誤答数について独立性の検定を行ったところ、5項目において有意差が見られた（表3）。前年度までの正答数に対して5%水準で有意に多いのは、

表3：オリエンテーション時・オンデマンド授業開始前の2年生学生の発達障害に関する知識

	平成29年度		平成30年度		令和元年度		令和2年度	
回答者数	240		249		257		248	
正答数(20問中)の平均	13.2		13.2		13.5		13.6	
SD	2.26		2.32		2.2		2.41	
設問	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率	正答数 誤答数	正答率
1) 自閉症は、他者とのコミュニケーションをとりたがらず自分の殻に閉じこもる症状を示す	109 131	45.4%	111 138	44.4%	106 151	41.2%	123 125	49.6%
2) ADHDは、親の育て方など生後の環境により発症するものである	175 65	73.3%	183 66	73.2%	177 80	68.9%	195 53	78.6%
3) 発達障害児の中には、ずば抜けて高い知能や天才的な能力を示す子供もいる	228 12	95.4%	240 9	96.0%	249 8	96.9%	234 14	94.4%
4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である	66 174	27.9%	59 190	▽ ▲ 23.6%	85 172	33.1%	107 141	▲ ▽ 43.1%
5) アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある	59 181	▽ ▲ 25.0%	74 175	29.6%	84 173	32.7%	108 140	▲ ▽ 43.5%
6) ADHD児がしばしば指示に従えず、課題をやり遂げることができないのは、反抗的な側面があるからである	193 47	80.8%	201 48	80.4%	196 61	76.3%	196 52	79.0%
7) ほとんどの発達障害児は一見して他の子供と違う特徴があるので、周囲から気づかれやすい	187 53	78.3%	197 52	78.8%	200 57	77.8%	198 50	79.8%
8) コミュニケーションが苦手な自閉症児でも、ジェスチャーなどの非言語的なコミュニケーションは得意である	114 126	47.9%	119 130	47.6%	125 132	48.6%	109 139	44.0%
9) ADHDは必ず、不注意、多動性、衝動性の3つの特徴を持つ	137 103	57.5%	142 107	56.8%	141 116	54.9%	162 86	65.3%
10) 自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである	142 98	59.6%	138 111	▽ ▲ 55.2%	154 103	59.9%	173 75	▲ ▽ 69.8%
11) 発達障害児は非行や触法行為などを起こしやすい	159 81	66.7%	176 73	70.4%	173 84	67.3%	156 92	62.9%
12) アスペルガー症候群には、自閉症と同様、社会性の発達に障害がある	193 47	80.8%	216 33	86.4%	219 38	85.2%	204 44	82.3%
13) ADHD児の中には、不注意から学習などの課題や活動に必要なものをしばしばなくしてしまう子供がいる	216 24	90.4%	221 28	88.4%	227 30	88.3%	217 31	87.5%
14) LD児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない	170 70	70.8%	180 69	72.0%	210 47	▲ ▽ 81.7%	158 90	▽ ▲ 63.7%
15) ほとんどの発達障害児は自分の障害特性に自覚がない	67 173	27.9%	65 184	26.0%	89 168	34.6%	84 164	33.9%
16) ほとんどの自閉症児は、知的障害を併せ持っている	130 110	54.2%	134 115	53.6%	156 101	60.7%	136 112	54.8%
17) LDの原因は、脳機能の障害である	184 56	77.1%	203 46	81.2%	207 50	80.5%	196 52	79.0%
18) ADHD児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするのは、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い	203 37	85.0%	215 34	86.0%	223 34	86.8%	192 56	▽ ▲ 77.4%
19) LDとは、書字と読字のみに障害を持つものである	205 35	85.8%	201 48	80.4%	205 52	79.8%	197 51	79.4%
20) 発達障害者の中には、成人になるまで障害に気づかれないこともある	224 16	93.8%	233 16	93.2%	241 16	93.8%	236 12	95.2%

(▲有意に多い, ▽有意に少ない, p<.05)

「4) LDは軽度の知的発達の遅れが原因である」(正答率43.1%.平成30年度に対して有意に多い),「5)アスペルガー症候群は、話しことばの遅れがある」(正答率43.5%.平成29年度に対して有意に多い),「10)自閉症は、過去に虐待を受けるなどして形成されたトラウマにより発症するものである」(正答率69.8%.平成30年度に対して有意に多い)の3項目であった。

前年度までの正答数に対して5%水準で有意に少ないのは、「14)LD児は、学習面での困難が主なので、運動面には全く問題がない」(正答率63.7%.令和元年度に対して有意に少ない),「18)ADHD児がしばしば他人の会話を妨害したり、順番を守れなかったりするの、そういうことをやってはいけないということが理解できないからであることが多い」(正答率77.4%.前年度までに対して有意に少ない)の2項目であった。

(2) 授業後の知識定着の比較

令和元年度(対面授業)と令和2年度(オンデマンド授業)の期末試験の得点について比較した。他学部生および再履修者、追試験受験者を除いた学生数は令和元年度A問題が127名、B問題が127名、計254名であり、令和2年度A問題が112名、B問題が121名、計233名であった。各年度のA問題、B問題はそれぞれ共通問題を設定しており、これを比較した。

1) 総得点の比較

令和元年度(対面講義)の総得点は平均86.69点SD10.14、令和2年度(オンデマンド講義)は平均85.33点、SD10.80で、対応のないt検定の結果、有意差は認められなかった($t(474.71) = -1.854, p = .064$) (表4)。

表4: 総得点の比較

	人数	平均	SD	t 値	p 値
令和2年度	233	85.05	10.89	-1.854	.064
令和元年度	254	86.83	10.24		

※教育学部2年生の比較。追試験受験者を除く。

令和元年度(対面授業)と令和2年度(オンデマンド授業)の総得点のヒストグラムを図6に示す。令和2年度の方が70点以下の者が若干多く、令和元年度は平均の86.69点を含む層が多い。

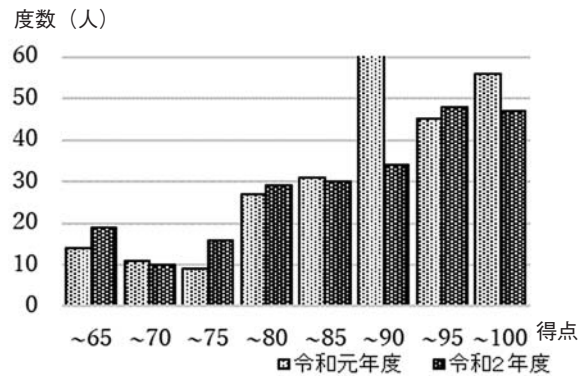


図6: 総得点の分布

2) 同一問題の比較

①通級による指導の障害種別の記述問題の比較

A問題「通級による指導の対象となる障害の種類について、弱視者、難聴者を除く7つの障害種別を回答欄1に書きなさい。」(記述式問題)の得点は、令和元年度(対面講義)は平均11.07点SD3.23、令和2年度(オンデマンド講義)は平均11.12点、SD4.03で、対応のないt検定の結果、有意差は認められなかった($t(212.23) = -0.095, p = .925$) (表5)。

表5: A問題1(記述式問題)の得点の比較

	人数	平均	SD	t 値	p 値
令和2年度	112	11.12	4.03	0.095	.925
令和元年度	127	11.07	3.23		

※教育学部2年生の比較。追試験受験者を除く。

②特別支援学級の障害種別の記述問題の比較

B問題「通級による指導の対象となる障害の種類について、弱視者、難聴者を除く7つの障害種別を回答欄1に書きなさい。」(記述式問題)の得点は、令和元年度(対面講義)は平均11.09点SD3.12、令和2年度(オンデマンド講義)は平均10.64点、SD3.12で、対応のないt検定の結果、有意差は認められなかった($t(233.11) = -1.041, p = .299$) (表6)。

表6：B問題の1（記述式問題）の比較

	人数	平均	SD	t 値	p 値
令和2年度	121	10.64	3.77	-1.041	.299
令和元年度	127	11.09	3.12		

※教育学部2年生の比較。追試験受験者を除く。

③教員採用考査過去問からの選択問題の比較

講義で演習・解説した教員採用考査過去問題のA問題（記号選択問題）の得点は、令和元年度（対面講義）は平均24.097点 SD3.91、令和2年度（オンデマンド講義）は平均24.71点、SD4.33で、対応のないt検定の結果、有意差は認められなかった ($t(225.38) = -1.169, p = .244$) (表7)。

表7：A問題2（選択式）の比較

	人数	平均	SD	t 値	p 値
令和2年度	112	24.71	4.33	1.169	.244
令和元年度	127	24.09	3.91		

※教育学部2年生の比較。追試験受験者を除く。

講義で演習・解説した教員採用考査過去問題のA問題（記号選択問題）の得点は、令和元年度（対面講義）は平均26.66点 SD3.64、令和2年度（オンデマンド講義）は平均26.03点、SD3.34で、対応のないt検定の結果、有意差は認められなかった ($t(244.86) = -1.364, p = .174$) (表8)。

表8：B問題2（選択式）の比較

	人数	平均	SD	t 値	p 値
令和2年度	121	26.03	3.71	-1.364	.174
令和元年度	127	26.66	3.64		

※教育学部2年生の比較。追試験受験者を除く。

4. 考察

(1) 授業開始前の発達障害に関する知識の比較

受講学生の授業開始前の発達障害に関する知識の比較では、4年間の総得点には有意差は見られなかった。特別支援教育について学ぶ前の段階の学生の知識は毎年あまり変わっていないといえる。一方、令和2年度の解答の一部に過去3年間の正解率との差が見られた。令和2年度は manaba course のアンケート機能を利用して実施してお

り、解答環境や時間を統一することができなかつたため生じたものであるか、学生の講義前の知識に変化が生じているかは判断できない。次年度以降のデータと合わせて考える必要がある。

(2) 授業後の知識定着の比較

1) 総得点の比較

令和元年度（対面授業）と令和2年度（オンデマンド授業）の期末試験の総得点について有意差は認められなかった。オンデマンド授業でも学生の学力が担保できたと考えられる。

2) 同一問題の比較

記述問題「通級による指導の対象となる障害の種類」「特別支援学級の対象となる障害の種類」、選択式問題「教員採用試験の過去問題」について、令和元年度（対面授業）と令和2年度（オンデマンド授業）の受講学生の得点に有意差は認められなかった。対面授業でもオンデマンド授業でも学生たちは「特別支援教育の基礎」講義に要求される「各自治体の教員採用考査の特別支援教育に関する問題を正答できる」理解レベルに到達できたと考えられる。

IV. おわりに

本稿は令和2年の新型コロナウイルス (COVID-19) 流行防止のためオンデマンド型授業を実施することとなった教育学部2年生の必履修講義「特別支援教育の基礎」について、前年度までの対面授業と同等の品質と学力保障ができるかという問題について、期末試験の結果等をもとに検証を行った実践研究である。期末試験結果の比較ではオンデマンド講義でも対面講義と同様の学習効果があげられることが確認できた。

視線入力により文書作成を行い人工音声発するALS当事者の三保浩一郎氏にゲストスピーカー遠隔講義をしていただけたことは、オンライン授業（遠隔授業）環境下で実現できたものであり、今後の講義を工夫していく上で大変参考になった。

オンデマンド講義を実施していく上で、オンデマンド講義の視聴に慣れない学生や、学習意欲の

継続に課題がある学生の指導には苦勞した。コースニュース「各回の授業コンテンツにおいて全ページの閲覧が確認できない学生の取り扱いについて(6月10日)」等を発信し学生に周知をはかったが、このコースニュースそのものを閲覧していない学生がいることが判明した。そこで、閲覧が滞りがちな学生、閲覧時間が極端に短い学生等については教務担当と連携し、個別に連絡して指導を行った。一斉授業では、欠席状況や学生の受講の様子を見て早期対応が可能であるが、オンデマンド講義では受講者の姿がつかみづらく、授業者から個別に励ますなどの働きかけが難しいという課題が残った。

オンデマンド講義では、昨年度まで実施してきた話し合い活動等が制限された。授業後アンケートでは「対面講義で受講したかった」という意見も散見された。

本稿ではコロナ禍で制限が多い中、オンデマンド講義でも学力は担保できることが検証できたが、授業者は対面授業と比べて多大な時間と労力を要した。学生も対面授業を希望しており、早く従来の授業が行えることを切望するものである。

謝 辞

オンデマンド講義「特別支援教育の基礎」の実施・運営にあたっては、皇學館大学教育開発センターや学生支援部教務担当の皆様のご多大なご支援ご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・教育職員免許法施行規則及び免許状更新講習規則の一部を改正する省令(平成29年文部科学省令第41号),平成29年11月17日,2017.
- ・株式会社朝日ネット,「manabaとは」
<https://manaba.jp/>(2020.12.1閲覧)
- ・菊地哲平,教育学部学生における発達障害のイメージ,接触経験・知識との関連,熊本大学教育実践研究,28,57-63,2011.
- ・大杉成喜,大学生の特別支援教育に関する知識・理解の現状と課題(1)-教育学部「特別支援教育の基礎」におけるアンケート調査を通して-,皇學館大学教育学部学術研究論集,2,13-24,2020.

Status Quo of Knowledge and Understanding of College Students
Regarding Special Support Education (2)
— Comparison of in-Person and on-Demand Classes —

OSUGI Nariki

Beginning in April 2020, Japanese universities restricted in-person classes in order to prevent the spread of COVID-19. At Kogakkan University, in-person classes were resumed in June 1. Along with in-person classes, the university also provided on-demand classes. “Essentials of Special Support Education” class in the Education Department, which this author taught, implemented the on-demand mode. This author compared students’ performances of two instructional modes using t-test at the students’ final exams. The average score of in-person class (last year) was 86.69 with SD 10.14, and the average score of on-demand class (this year) was 85.33 with SD 10.80. There was no statistical difference. The test results demonstrated the effectiveness of two modes. However, according to instructor’s specific questions, a number of students still preferred to take in-person classes. It was indicated that individual supports should be provided for those drive to learn independently is fairly low.

Keyword : *Special Support Education / Knowledge and Understanding / on-demand classes / COVID-19*